

## 【シリーズ】映画にも描かれた地方創生、「美波町モデル」とは

平成26年に施行された「まち・ひと・しごと創生法」を踏まえ、平成27年度に5カ年計画として策定された「美波ふるさと創造戦略」も本年度、最終年をむかえます。

「美波ふるさと創造戦略」はこの町にどんな変化をもたらしたのか。また、映画を機にさらに注目を集めている美波町の地方創生とは何なのか。

サテライトオフィス第1号の進出からの7年を振り返り、「美波町モデル」を解き明かしていくシリーズです。

### ◆ Vol.2 趣味と仕事、そして「つとめ」のある生活。

仕事と趣味を両立できる暮らし方がある。「半×半IT」を提唱し、人材難という経営課題を克服したサイファー・テック株式会社の事例は、当時多くのメディアで取り上げられました。

翌年には、早くも第2号となる企業が進出。株式会社鈴木商店(大阪府)が恵比須浜地区の古民家を改修し、サテライトオフィス「美雲屋」を開設しました。



サイファー・テック株式会社、美波ラボ開所の様子。



株式会社鈴木商店の美雲屋。

現在も美波町のサテライトオフィス誘致は順調に進んでいますが、世情は「波乗りオフィスへようこそ」のモデルとなった最初期、2012年頃とは大きく異なり、今や全国各地の地方自治体が地方創生・地域振興事業を展開しています。

そんな中で人口7,000人足らずの小さな町が他に埋もれることなく、地方創生の先進事例として変わらず注目を集め続けているのはなぜなのか。その要因として挙げられているのが、誘致事業で一番難しいとされる定着率の高さ、そして地域と企業や移住者のつながりの深さです。

美波町には祭事から草刈りまで様々な町内会活動、地域社会の中で汗をかき貢献する「出役」があります。サテライトオフィス企業関係者も移住者も、地元出身者も関係なく、今住む地域のために責任を分かち合い、取り組む。このつとめ、「出役」こそが地域に馴染み、溶け込むきっかけになっているとされているのです。

「のんびりスローライフなんてとんでもない！」あるサテライトオフィス企業関係者はそう笑った後、「でも地域のお役に立てた時、感謝された時の充足感は格別です」と続けます。

この意外に忙しい田舎暮らし、人と人のつながりを大切にする風土こそが、県内最高の19社進出に結びついたとも言えるのではないのでしょうか。 <つづく>